

書評

彌永昌吉著 岩波書店

数学者の 20 世紀

彌永昌吉エッセイ集 1941 - 2000

彌永昌吉先生がこれまでに書かれたエッセイを岩波書店の担当者が集めたものに、新たに書き下ろした 5 編を加えたものが本書である。旧稿が主とはいえ、再録にあたって先生はこれまで常にそうしていたように丁寧に調べ十分な注意を払っている。執筆という神経をすり減らす仕事を白寿に近い人がしているのに驚かされる。1906 年生まれであるから本書を出されたとき著者は 94 歳である。章立てを見てみよう。

1 章 数学と数学史, 2 章 戦後の時代, 3 章 読んだ本から・ことばの問題, 4 章 教育の問題, 5 章 先輩と友人, 6 章 平和への思い

第 1 章ではギリシャ数学から始めた数学史, 「オイラーの代数学」, 「古典力学の公理系」などが論じられている。特に後者は新たに手を加え (2000 年改稿とある) ている。第 2 章では主に、戦後に開催された数学の国際会議関係を主に扱っているが、そのイントロダクションとして「戦前・戦中・戦後」を新たに書き加えられた。

劇作家マリヴォー, 歌人会津八一, 哲学者プラトンなど数学に関係しない方々の紹介, また、戦前の「皇国民の数学教育」, 戦後の「数学教育現代化」, 「中教審答申」などを論じた数学教育関係のものに加え、数学者諸氏 (末綱恕一, 秋月康夫, 三村征雄, 守屋美賀雄, 吉田耕作, 小平邦彦, 岩澤健吉, 鈴木通夫, シュバレー, ヴェイユ) に対する追悼文が多数あり、これらを読み進むと現代数学の 1 断面を垣間見ることができる。

彌永先生は高木貞治博士の高弟で、東京帝国大学、東京大学の数学科の教授として永く勤め、戦後の日本数学会の再建と運営にきわめて大きな働きをした。岩波数学辞典の作成、国際数学会議や国際数学教育委員会との関わり、また数学教育に関したこと、さらには平和問題など数学者としての働きの他に真の意味の教養人としての活躍も見事なものである。

本書の題名は学習院大学での土曜セミナー (著者が在職中から連綿として続いている) 参加者の意見を参考にして決められたそうだが「数学者の 20 世紀」という題名は印象深いものである。「ある数学者の 20 世紀」などの平凡な題を避けて「数学者の」と踏み込んだところに、本書の持つある種の普遍性への志向が感じられる。

2001 年 1 月はじめに夫人が急逝されたのは痛ましい限りであるが、その後も学習院大学での土曜セミナーにほぼ毎回出席されているし 94 歳になって執筆上の必要性からはじめられた *email* は旧来の草書体からコンピュータ字に変わって世界を駆けめぐり友人知己のもとに届いているそうである。

(飯高 茂, 学習院大学)